

わび、さび、たびたび

工芸館ではこれまでに、所蔵作品展や巡回展などで、“たびたび”茶の湯に関する展覧会を企画してきました。工芸館の展覧会では、“茶の湯”が歴史の教科書で見えるような遠い世界ではなく、現代に息づく文化であることを感じられるような、近・現代のうつわとして親しみを感じられるものを選び、工芸鑑賞に新たな視点を得られる機会として構成しています。また、茶席で道具に向かうとき、席主が聞かせてくれるはなしを聞くように、会場のパネルなどで作品についての見どころを紹介しています。

参考図版：2015年度所蔵作品展「近代工芸と茶の湯」展→



作品紹介

作者の川喜田半泥子（1878-1963）は「昭和の光悦」とも称された陶芸家。自信作の箱書には「自作」と書いたといわれ、《赤不動》はその代表作の一つ。志野釉を施す際に入ったヒビを焼成後に金継ぎをして、それを見どころとしています。銘は、大らかな器形に、焼成による緋色と金継ぎが合わさった姿から、赤い身色の不動明王を連想したものと思われま

広報用図版②

川喜田半泥子《志野茶碗 赤不動》1949年
東京国立近代美術館蔵



作品紹介

ザビエルに捧げる茶会で観たクロス文字入りの水指から着想を得たクロス形の水指で、金彩が全体に施されています。その側面には、「WABI」「SABI」の文字を認めることができます。作者の三輪栄造（1946-1999）は「萩焼」の人間国宝・三輪壽雪の次男。茶陶をはじめ、オブジェなどの立体造形作品にもチャレンジした、萩焼を代表する陶芸家の一人。

広報用図版③

三輪栄造《金彩クルス水指》1993年
東京国立近代美術館蔵



作品紹介

三輪壽雪（1910-2012）は「萩焼」の人間国宝（十一代休雪）であり、兄・休和（十代休雪）とともに「休雪白」と呼ばれる白萩釉（藁灰釉）を完成。荒々しい素材感を持つ「鬼萩」と、独自に発展させた「割高台」を融合し、それに白萩釉を施した「鬼萩割高台茶碗」は壽雪を代表する茶碗の姿です。本作は、壽雪が96歳で制作した最晩年の代表作です。

広報用図版④

三輪壽雪《鬼萩割高台茶碗》2006年
東京国立近代美術館蔵

人間国宝の名品から若手作家による2016年最新作まで、全部で180点以上！たっぷりご紹介します。



（左）広報用図版⑤

高橋奈己《白磁茶碗》2016年 個人蔵



（右）広報用図版⑥

津金日人夢《青瓷花生》2016年 個人蔵

加藤孝造の“瀬戸黒”、松田権六の“蒔絵”、三輪休和の“萩焼”など、「茶の湯のうつわ」の中に、重要無形文化財保持者（人間国宝）のわざが見られる作品をご覧ください。茶碗、茶器（茶入）、水指、花器など、近年の新収蔵作品も加えて、選りすぐりの名品をご紹介します。



（左）広報用図版⑦ 加藤孝造《瀬戸黒茶盃 昇竜》
2011年 東京国立近代美術館蔵



（右）広報用図版⑧ 松田権六《蒔絵茶碗》
1960年 東京国立近代美術館蔵

近年、制約にとらわれない自由な発想から茶の湯のうつわを生み出そうとする動きが活発に展開されています。本展でも所蔵作品に加えて、現代作家の最新作、まさに「旬」の茶の湯のうつわをご紹介します。

見立ての楽しみ

「見立て」とは鑑賞者の美意識によって、本来は茶の湯の道具でない器や造形物などを茶の湯の世界に持ち込むこと。

水指や花器などは、古くから「見立て」による他の器からの転用によって多彩な広がりを見せてきました。現代においても、海外の作家の作品を茶碗として用いたり、小さな蓋物を香合として楽しんだりして、その場に新鮮な感動とお洒落な雰囲気演出することも少なくありません。使い手からの趣のあるもてなしとして「見立て」を取り入れることが、茶の湯を楽しむ一つの方法でもあります。



広報用図版⑨
ルーシー・リー《ピンク線文碗》1975-79年頃
東京国立近代美術館蔵

“三つの茶室「受庵」「想庵」「行庵」”

持ち運ぶことを前提として作られた“可動性”をもつ茶室が工芸館にやってきます。

インテリアデザイナー・内田繁（1943-）氏が制作し、ミラノ、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、スウェーデン、オーストリアなど海外にも巡回した組み立て式の茶室です。壁ではなく、竹材など光を通す素材に囲まれ、茶の湯の空間に対する作者の意識が感じられます。

本展では、実際に中に入ってその空間の中でうつわに向き合う、特別な鑑賞体験ができます。



広報用図版⑩
内田繁《受庵 想庵 行庵》1993年
内田デザイン研究所蔵
撮影：Nacasa & Partners Inc



都内の美術館や教育機関、工房など、工芸に関わる100の機関が連携して、2016年10月22日～2017年1月29日まで、21世紀鷹峯フォーラム in 東京「工芸を体感する100日間」が開催されます。本展でもそれに関連したテーマ展示やワークショップを行います。

▲テーマ展示「朱」

フォーラムにおける今年のテーマのひとつである「朱」。本展でも、黒田辰秋の《赤漆流稜文飾手箱》をはじめ、朱漆や赤漆、また広く朱や赤色に彩られた工芸作品を展示紹介し、「朱」の魅力を感じられるコーナーを設けます。

作品紹介

頂点から器底に向かって回転しながら5本の曲線をひき、それを稜線にした茶器。捻りの造形は、黒田辰秋（1904-1984）が得意としたもので、艶やかな赤漆と相俟って力強い印象を与えます。黒田は「木工芸」の人間国宝。素地の制作から塗りや加飾による仕上げまでを一貫して手掛けたことで知られています。



広報用図版⑩
黒田辰秋《赤漆五稜茶器》1980年頃 個人蔵

▲工芸制作ワークショップ（事前申込、抽選）

※お申込み方法等は、後日当館HPでご案内します。

工芸作家の方を講師に、陶芸や漆芸など工芸制作を体験するワークショップを開催します。

陶芸（絵付） / 1月15日（日）14:00～16:00
講師：前田正博氏（陶芸家、日本工芸会正会員）
（対象：小学生）

漆芸（蒔絵） / 2月5日（日）14:00～16:00
講師：松崎森平氏（漆芸家、日本工芸会正会員）
浅井康宏氏（漆芸家、日本工芸会正会員）
（対象：小学4年生～中学3年生）

定員：各回15名（抽選）

会場：東京国立近代美術館工芸館

協力：日本工芸会、

100年後の工芸のために普及啓発実行委員会

開催概要

展覧会名	(日本語) 所蔵作品展「近代工芸と茶の湯Ⅱ」 (英語) <i>Kōgei</i> (Modern Crafts) and the Tea Ceremony II from the Museum Collection
会期	2016年12月17日(土)～2017年2月19日(日)
開館時間	午前10時～午後5時 (入館は閉館30分前まで)
休館日	月曜日(1月2日、9日は開館)、12月28日(水)～1月1日(日・祝)、1月10日(火)
主催	東京国立近代美術館
会場	東京国立近代美術館工芸館
アクセス	東京メトロ東西線「竹橋駅」1b出口 徒歩8分 東京メトロ東西線・半蔵門線 / 都営新宿線「九段下駅」2番出口 徒歩12分 〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園1-1

一般210円(100円) 大学生70円(40円)

高校生以下および18歳未満、65歳以上、「MOMATパスポート」をお持ちの方、友の会、賛助会員、MOMAT支援サークルパートナー企業(同伴者1名まで、シルバー会員は本人のみ)、キャンパスメンバーズ、障害者手帳をお持ちの方とその付添者(1名)は無料。

観覧料	* () 内は20名以上の団体料金。いずれも消費税込。 * 割引・無料には入館の際、学生証・運転免許証など年齢のわかるもの、会員証、社員証、障害者手帳をご提示ください。
-----	--

※1月2日(月)、2月5日(日)は無料観覧日です。

◆ギャラリートーク 唐澤昌宏(当館工芸課長・本展企画者)
12月18日(日)、12月25日(日)、2月12日(日)
展覧会のみどころをわかりやすく解説します。

イベント情報

内容や日程については変更の可能性
があります。最新情報はHPで
ご確認ください。

◆タッチ&トーク
会期中毎週水・土曜日
工芸館ガイドスタッフによる鑑賞プログラム。〈さわってみようコーナー〉と会場トークの2部構成で、展覧会の見どころを紹介します。

※いずれも、14:00～15:00。申込不要・参加無料(要当日観覧券)

掲載用お問い合わせ先 Tel: 03-5777-8600 (ハローダイヤル)

公式HP <http://www.momat.go.jp>

工芸館

赤レンガが目印の工芸館の建物は1910年(明治43年)に建てられた旧近衛師団司令部庁舎を保存活用したもので、1972年に重要文化財に指定されました。冬の始まりには北の丸公園の紅葉、新春には皇居の一般参賀など周辺にぎわいのある季節です。



広報用図版 請求票

FAX : 03-3211-7783 (工芸課) 広報担当 行

発信日 年 月 日

<input checked="" type="checkbox"/>	No.	作品
	1	「近代工芸と茶の湯Ⅱ」展チラシ
	2	川喜田半泥子《志野茶碗 赤不動》1949年 東京国立近代美術館蔵
	3	三輪栄造《金彩クルス水指》1993年 東京国立近代美術館蔵
	4	三輪壽雪《鬼萩割高台茶碗》2006年 東京国立近代美術館蔵
	5	高橋奈己《白磁茶碗》2016年 個人蔵
	6	津金日人夢《青瓷花生》2016年 個人蔵
	7	加藤孝造《瀬戸黒茶盃 昇竜》2011年 東京国立近代美術館蔵
	8	松田権六《渚時絵桼棗》1960年 東京国立近代美術館蔵
	9	ルーシー・リー《ピンク線文碗》1975-79年頃 東京国立近代美術館蔵
	10	黒田辰秋《赤漆五稜茶器》1980年頃 個人蔵
	11	内田繁《受庵 想庵 行庵》1993年 内田デザイン研究所蔵 撮影：Nacasa & Partners Inc

- ・ご希望の図版の左枠内に✓を入れてFAXでお送りください。
- ・作品図版はJPEGデータをご用意しています。
- ・展覧会広報のみにご使用ください。著作権保護のため、他の目的でのご使用は固くお断りいたします。
- ・掲載見本を広報担当者へご寄贈ください。(Webサイトの場合は掲載時にお知らせ下さい)

ご担当者名：

E-mail：

貴社名：

出版物・放送番組・ウェブサイト名：

URL (http://www)

掲載予定号・発行日/放送・公開日時等：

電話番号：

()

Fax:

()

*展覧会をご紹介いただける場合は、読者プレゼント用招待券をご用意いたします。

希望しない/希望する (組 枚)

〒

チケット送付先：

【報道関係の方からの本資料に関するお問い合わせ先】

東京国立近代美術館工芸館 広報担当/高橋 TEL:03-3211-7781 (工芸課直通)

E-mail: koge-pr@momat.go.jp HP: http://www.momat.go.jp

※工芸館広報のメールアドレスが新しくなりました。